

中学校異文化交流の効果検証

Investigating the Effects of Intercultural Events in Junior High Schools

金子 義隆

KANEKO Yoshitaka

Abstract

This paper investigates the effects of intercultural events held in Adachi public junior high schools with the help of international students from Meikai University. Questionnaire surveys were conducted after each event among junior high school students to find out what they thought about the event. 694 students responded and the results were calculated and analyzed through statistical methods such as regression analysis. The results show that over 90% of the students enjoyed communicating with the international students in English and that approximately three out of five students had successful experiences in English communication. The results also show that junior high school students successfully learned something about different cultures. In addition, international students also enjoyed the events and learn about Japanese school culture to some degree. Moreover, the results show that over 80% of junior high school students were more motivated to study English, which is a hoped-for attitude students should have after the events. Finally, this study presents a student model who was successfully motivated to study English harder after the events. The model illustrates factors helping students to become motivated toward English learning.

キーワード：異文化交流，留学生，中学生，英語学習，重回帰分析

1. 異文化交流の意義

足立区と連携協定を締結した2016年度より、足立区教育委員会と連携して小中学校に対して本学の研究・教育資源を生かした英語教育支援をおこなってきた。その一環として、世界のさまざまな国・地域から来ている本学留学生と足立区の中学生が英語を使ったおこなう異文化交流会を実施してきた。2019度は、合計6回の異文化交流会を6校の区立中学校と実施した。

始めに、異文化交流会をおこなうことになった目的を整理する。新学習指導要領が小学校では2020年度、中学校では2021年度、高等学校では2022年度から順次実施されていく。今回の改訂では全校種

を通して育成すべき資質・能力が以下の通り3つの柱に整理された（文部科学省，2017）。

- ① 生きて働く知識・技能の習得
- ② 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成
- ③ 学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養

上記の3つ目の点は、生徒の学びに対する姿勢・態度に関するものである。第二言語習得の研究分野では「動機付け」研究の中で扱われる事項であるが、英語学習に対する生徒の主体的な態度の育成の重要性を強調したものと言える。学習は生徒の頭の中で起こる現象であって、主体者はあくまでも生徒である。教師は生徒の学習を助けたり、促進させたりする存在である。昨今、英語教育界では教師を

「ファシリテーター」と呼ぶことがあるが、教師の役割の理解がまさにそう呼ばれることになった所以である。学習が生徒の頭の中で起こる現象であるならば、学習の主体者は生徒である。生徒が学びに対してどういう態度を持っているかは学びの成果を大きく左右する要因である。つまり、生徒が英語学習を教師や親などの他者の影響で仕方なく行っているの、自ら進んで主体的に取り組んでいるのでは学習の結果が変わってくるのである。もちろん、後者が望ましいのは言うまでもない。

主体的な学びを導くのに、大切な一つの要因は「自己効力感」である (Bandura, 2001)。Bandura によれば、自己効力感とは、ある物事をやり遂げるための能力を自分が持っているかどうかの自己評価である。自己効力感は常に一定ではなく、過去の経験によって大きく影響される。英語学習において、何度も「できた」「わかった」「通じた」などの「成功体験」を積み重ねることで高い自己効力感を持つことができるのである。

また、心理学の自己決定理論によれば、人が自ら進んで行動を起こすには、「自律性」「関係性」「有能性」の3つの心理的基礎欲求が満たされる必要があるとされている (Deci & Ryan, 1985)。最後の「有能性」という概念が上述した「自己効力感」と同じ概念と考えられる。つまり、心理学の主要な動機付け理論の中で、「自己効力感」や「有能性」という概念は重要な要因となっている。さらに、金子 (2018) が中学生約 2,500 人に対して実施した英語学習意識調査によると、23 個の動機づけ概念の内最も学習頻度や学習量に結び付いた概念は「自分には英語を身につける能力がある」(p. 12) であった。このように、英語学習に対して自分の能力に自信を持つことは英語学習への取組みに大きく影響を与えるのであると言える。

しかし、日本のように日常生活で英語に触れる機会をあまり期待できない「英語が外国語の環境」(EFL 環境) では、「自己効力感」を促進するため

の「成功体験」を積み重ねることは簡単ではない。なぜなら、多くの生徒の場合、英語を使う機会が英語の授業に限られてしまうからだ。しかも、その授業が教師による文法指導が中心で、生徒間のコミュニケーション活動が乏しい場合、「英語が通じた」という体験はほとんどできないであろう。英語が「できた」「わかった」「通じた」を体験できる授業設計であることがとても重要である。だから、英語の授業の役割は非常に大きい。

「成功体験」を積むことのできる授業への助けになることが、この異文化交流事業の第一義的な目的である。留学生との交流を通して、生徒に実際に英語でコミュニケーションする機会をふんだんに与え、英語が「通じた」「わかった」という成功体験をたくさん持ってもらうことである。この「成功体験」の積み重ねを通して、英語学習に対する主体的な態度を育成してもらうことがねらいである。

第二の目的は、生徒に英語圏のみならず世界にある多種多様な異文化に対する理解を深めてもらうことである。本学の留学生は、むしろ英語圏よりも東アジア、東南アジア、南アジア、中央アジアなどの非英語圏出身が多い。教科書でもなかなか紹介されない国の文化に触れることで、文化の多様性や世界の広さなどを生徒が知るきっかけにしてもらうこともねらいである。

そして、3 番目の目的は、本学留学生に日本の学校文化を経験してもらい、日本への理解を深めてもらうことである。実際に日本の中学校に出向いて校舎や教室を見学し、中学生と一緒に給食を食べたりコミュニケーションを図ったりして、彼らがどのようなことに興味関心を持っているのかなどを知るとは留学生の日本理解を促進させることになる。上述の異文化交流会の目的を整理すると、以下の3つとなる。

- ① 中学生が世界のさまざまな国から来ている本学留学生と英語でコミュニケーションを図ることで、英語でコミュニケーションする楽しさを

体験し、英語が通じる体験をする。

- ② 中学生が世界にはさまざまな言語や文化があると実感し、異文化理解を深める。
- ③ 本学留学生が日本の中学生との交流を経て、日本人や日本文化への理解を深める。

2. 異文化交流会の概要

以下に、足立区の中学校6校で取り組んだ異文化交流会の概要を簡潔に記す。

2.1 A 中学校での取り組み

- ① 参加者：本学留学生8名と3年生約130名
- ② 参加留学生出身国・地域：スリランカ、タイ、台湾、フィリピン、ベトナム（計5カ国・地域）
- ③ 概要：留学生8人は、2時間目から6時間目までの英語の授業で、中学生3、4人のグループに1人ずつ入り、自分自身と自国文化について写真を活用して紹介した。その後、中学生が日本文化を留学生に紹介した。例えば、忍者や浴衣、ドラゴンボールなどである。その後、カードを使ってあるトピックについてグループ内でお互いの意見を交換する活動を行った。

2.2 B 中学校での取り組み

- ① 参加者：本学留学生7名と2年生44名
- ② 参加留学生出身国・地域：台湾、中国、ベトナム、モンゴル（計4カ国・地域）
- ③ 概要：留学生7人は、2時間目と3時間目の英語の授業に参加した。授業では、まず留学生が自己紹介をし、その後中学生が学校紹介や日本文化のプレゼンテーションを行い、外国人が日本で買って帰るお土産のランキングをクイズ形式で紹介した。日本文化のプレゼンテーションでは、書道や折り紙、マンガ、空手などのデモンストレーションがあった。

2.3 C 中学校での取り組み

- ① 参加者：本学留学生5名と3年生約60名
- ② 参加留学生出身国・地域：タイ、パキスタン、ベトナム、モンゴル（計4カ国・地域）
- ③ 概要：留学生5人は、3時間目と4時間目の英語の授業に参加した。授業では、中学生5、6人のグループに1人の留学生が入り、留学生が自己紹介をし、その後中学生が留学生に質問をした。

2.4 D 中学校での取り組み

- ① 参加者：本学留学生6名と1・2・3年生約150名
- ② 参加留学生出身国・地域：スリランカ、タイ、ベトナム、モンゴル（計4カ国）
- ③ 概要：留学生6人は、2時間目から6時間目の英語の授業に参加した。授業では、中学生5、6人のグループに1人の留学生が入り、留学生が自己紹介をし、その後中学生が留学生に英語で質問した。その後、「英語シトリ」や図形の英語カードを使って「神経衰弱」をしたりした。

2.5 E 中学校での取り組み

- ① 参加者：本学留学生8名と1・2年生約330名
- ② 参加留学生出身国・地域：スリランカ、タイ、台湾、フィリピン、ベトナム（計5カ国・地域）
- ③ 概要：留学生8人は、2時間目から6時間目の英語の授業に参加した。1クラスに留学生1人または2人で入り、留学生が写真やオリジナルのポスターなどを使って、自分自身や自国の文化を紹介した。また、「スピーカーズボックス」という活動で、ボックスの中に入っているカードを引いて、そのカードに書かれているト

ピックについて、中学生が留学生に質問した。なかなか上手に質問できない場面もあったが、何とか工夫して英語で伝えようとした。

2.6 F 中学校での取組み

- ① 参加者：本学留学生 5 名
- ② 参加留学生出身国：韓国, 台湾, タイ, 中国 (計 4 カ国・地域)
- ③ 概要：毎時間留学生が中学生 5, 6 人のグループに 1 人ずつ入り、写真などを使って自分自身や自国の文化を紹介した。例えば、カレーやスープなどの有名なタイ料理や中国の兵馬俑などを紹介した。その後、今度は中学生が自分の好きなスポーツやアニメ、趣味などを含めた自己紹介をし、留学生が質問してコミュニケーションを楽しんだ。最後に、留学生から聞いたことを基にして中学生が留学生をクラス全体の前で紹介した。

3. 異文化交流会の効果検証

3.1 目的

本研究の目的は以下の 2 つある。

目的 1：上述した異文化交流会の 3 つの目的が十分に達成されているかを検証することである。

目的 2：異文化交流会を通して日常の英語学習に対してやる気を向上させるに至った生徒のモデルを特定することである。

目的 1 は、異文化交流会の PDCA サイクルを回す観点から、その効果を検証し、結果を今後の事業改善に生かすためである。目的 2 は、やる気を向上させた生徒モデルの解明によって、将来多くの生徒の動機づけを強めるための異文化交流会プログラム開発への寄与としたい。

3.2 参加者

上述の異文化交流会に参加して、事後アンケートに回答してくれた 5 校の中学生 694 人である。学校によって参加した生徒の学年にはばらつきがある。アンケートの対象は全員であるが、アンケート実施のタイミングは各校でばらつきがあった。交流会の当日に実施した場合と交流会実施の数日後に実施する場合とあったからである。数日後に実施した場合、アンケートの実施時に欠席している生徒も数名いた。

3.3 方法

異文化交流会実施後に、参加者に事後アンケート(資料 1 参照)を実施した。5 件法で 9 個の質問をした。生徒は自分で当てはまる数字を○で囲む方式をとった。最初の 7 つの質問は異文化交流会に関連するものであり、最後の 2 つは生徒の英語に対する好意度・得意度を尋ねる質問であった。この 2 つの質問の意図は、生徒の持つ通常の英語に対する意識が異文化交流会にどのように作用するのかを調査するためである。

4. 結果及び考察

ここからは、回答の結果を一つずつ考察していきたい。図 1 が示すように、「英語での交流は楽しかった。」という質問に対して「よく当てはまる」と「少し当てはまる」を合わせた肯定的回答は 93% という結果となった。肯定的回答率の高さだけでなく、否定的回答がわずか (1.1%) であることが明らかになった。上述したが、この異文化交流会の目的①は、生徒が留学生と英語のコミュニケーションを楽しむことであった。この回答の結果から判断して、この目的の前半部分の「英語交流が楽しい」という体験をするというねらいは十分に達成できたと言える。

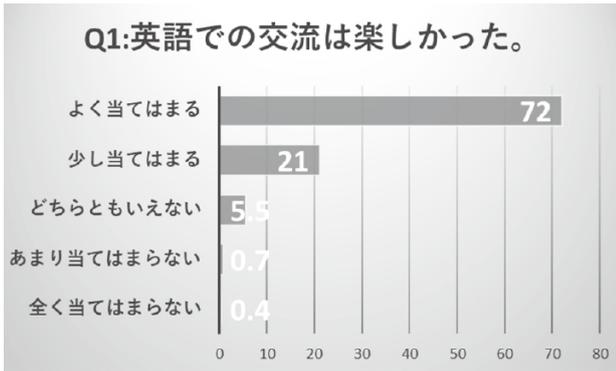


図1 質問1への回答結果

図2は、「いろいろな文化を実感した。」という質問に対する回答の結果を示している。質問1同様に「よく当てはまる」と「少し当てはまる」を合わせて93.3%とかなり高い割合の生徒が肯定的回答をした。

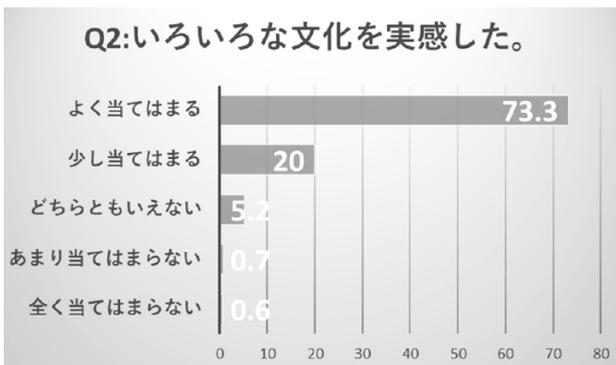


図2 質問2への回答結果

交流会では、留学生が自己紹介を行う場面が多かった。その中で、自国紹介も含まれていて、写真を用いて自国の文化の特徴を紹介していた。このことが今回の調査結果に表れたと見ていいだろう。文部科学省(2017)は「中学校学習指導要領」の中で、「外国語の背景にある文化に対して理解を深めることを目標としている(p.129)。外国語である英語を学ぶ上で、異文化への理解は不可欠である。そもそも、言語は文化の一部であり引き離して考えることはできない。文化を学ぶことで言語をより理解できる。異文化理解は英語教育の重要な要素である。交流会を通して、生徒は異文化の存在を目の当

たりにできたことはとても意義があると言える。この結果から、上述したこの異文化交流会の目的②が十分に達成できたと言える。

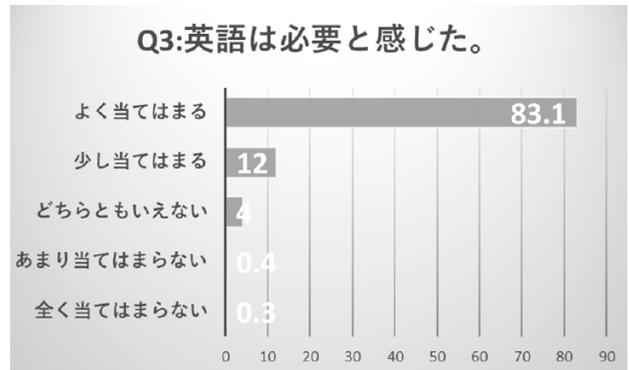


図3 質問3への回答結果

図3が示すように、95.1%の生徒が「英語は必要」と肯定的に回答した。全ての質問の中でこの質問が生徒から肯定的な回答を最も多く得た。交流会を通して、ほとんど全ての生徒が英語の必要性を実感できたようだ。交流会では、使用言語は英語であり、英語が唯一のコミュニケーション手段となっていた。生徒たちは、何とか英語を使って留学生とコミュニケーションを図ろうとしていた。この生徒の試行錯誤の体験を通して、「英語が必要」と実感したようだ。

図4は、生徒がどのくらい英語が「通じた」と感じたかを調査した結果である。「よく当てはまる」と「少し当てはまる」を合わせて57.7%と5人中3人近くの生徒がある程度「成功体験」をした結果だと言える。一方、成功体験を得られなかった生徒(14.7%)もいる。「どちらともいえない」と回答した生徒も合わせれば、5人中約2人は成功体験を十分に得られなかった。この結果から、この異文化交流会の目的①の「英語が通じた」体験をするという後半部分は、6割は達成できたと言える。



図4 質問4への回答結果

しかし、図4が示すように残りの4割は十分に成功体験をしたと言えない。この点が今後この事業を行っていく上で改善の余地があると言える。より多くの生徒が「成功体験」を得られるために、考えられる方策はいくつかあるだろう。その一つは、中学校での日頃の授業との融合である。つまり、授業で習った英語の表現や文法などをこの交流会の中で使えるようにプログラムを考えることである。例えば、未来の予定を伝えるための“be going to”を習ったなら、交流会プログラムの中に、今度の週末に何をする予定かを留学生とお互いに伝え合おうというタスクを入れておくことである。事前にプログラムにそういうタスクが入ると知っていれば、中学校側では、授業の中でお互いの週末の予定を尋ね合うコミュニケーション活動を生徒同士で行わせて、練習しておくことができる。そして、十分練習した後でこの交流会を迎えれば、留学生に自分の週末の予定をよりうまく伝えることができるだろうし、留学生がどんな予定を持っているかを聞いて理解することもより容易になるであろう。このように、交流会で実際に行われるコミュニケーションの具体を想定して日頃の授業内容と関連付けることで生徒が授業で身につけたことを発揮しやすくなり、成功体験が得やすくなると考えられる。

図5によれば、「英語をもっと話せるようになりたいと思った」かについて、ほとんどの生徒(87.3%)が肯定的回答をした。この交流会を通し

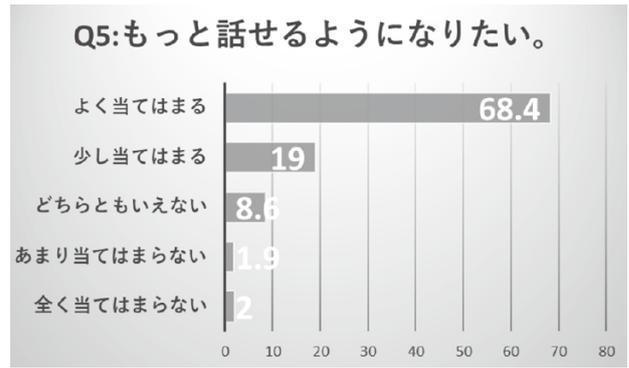


図5 質問5への回答結果

て、9割近くの生徒は英語を話せるようになりたいと感じたことが分かる。交流会を通して、ある生徒は思った以上に英語を話せなかったと感じたかもしれないし、別な生徒はある程度通じたが、もっと言えるようになりたいと感じたかもしれない。また、自分より上手に英語を話す友達を見て、「あんなふうに話してみたい」「負けてられない」など感じた生徒もいたかもしれない。さまざまなケースが考えられるが、多くの生徒にとって高い英語力へのあこがれを抱かせる機会になったようだ。

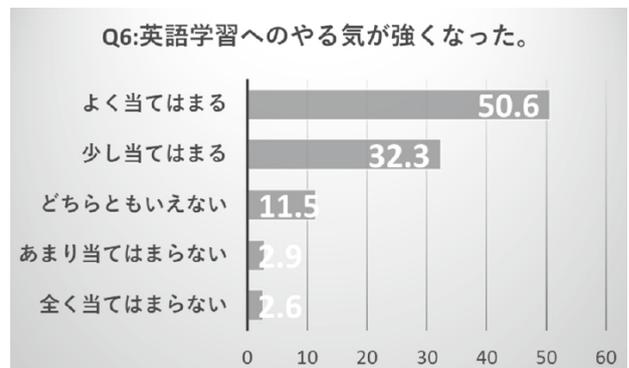


図6 質問6への回答結果

図6は、英語学習へのやる気をどの程度の生徒が強くしたかを表している。この質問に対して、「よく当てはまる」と「少し当てはまる」と回答した生徒の合計82.9%であった。この交流会は生徒たち年に何回も体験できるものと違い、「運動会」や「文化祭」などと同じように1年に1度あるかないかの一つの「行事」的なものである。この行事を通し

て、「英語が楽しい」とか「異文化は面白い」とか「英語は必要」、「もっと話ができるようになりたい」と感じたとしても、その時限りで、その後が続かないのであれば、効果があったとは言えない。しかし、この結果を見れば、この事業が一過性のものでなく、生徒の日常の英語学習へ還元するものであることを示している。当然、この結果だけでは、その後の生徒たちの学習態度の変化を知ることはできないのだが、少なくとも交流会終了後に英語学習へのやる気を強めたことが分かる。



図7 質問7への回答結果

図7では、82.4%とかなり高い割合の生徒が「また交流したい」と回答した。この事業がかなり好評であったことが分かる。つまり、8割を超える多くの生徒が異文化交流会に対して肯定的な感情を抱いたようだ。彼らにとっては、英語を好きになるきっかけになったかもしれない。上述した異文化交流事業の目的①は、生徒たちに「英語は楽しい」、「通じた」という肯定的な成功体験をたくさん積むことであったが、この目的はこの質問の回答からも達成できたと言える。

最後の2つの質問は、英語に対する意識、ここでは好意度と得意度に関するものである。上述したように、この2つの質問の意図は、生徒の英語に対する意識の違いが交流会の効果にどのような影響を与えるかを調べるためである。

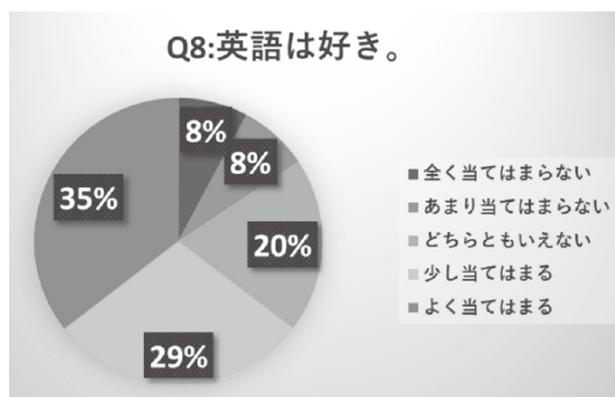


図8 質問8への回答結果

図8は、英語の好意度調査の結果である。64%の生徒が英語に対して肯定的な回答した。一方、否定的回答の合計が16%ととても少ない。つまり、「英語好き」は相当する存在するが、英語を毛嫌いするほどの生徒は決して多くないことが分かった。この結果によれば、足立区の8校の学力重点校に対しておこなった金子(2018)の調査結果(英語好き、57%)や対象が中学1年生のみであったBenesse(2014)の全国規模調査平均(57%)よりも「英語好き」は多かった。



図9 質問9への回答結果

図9によれば、「得意」と答える生徒は34%であった。これは金子の調査(44%)よりもかなり低くなっていた。さらにBenesse(56%)と比べると、もっと低いことがわかった。つまり、今回交流会に参加した中学生は、比較的「英語好き」が多く、英語を得意と感じる生徒は平均レベルよりかなり少ないことが明らかになった。



図10 9つの質問の平均得点表

図10は、9つの質問ごとの平均得点表である。上述したように、「よく当てはまる」(5点)から「全く当てはまらない」(1点)の範囲の中で生徒は選択し、合計を出した。この平均得点表から分かるように、一番得点が高かったのは、「Q3: 英語は必要と感じた」であった(4.77)。つまり、他のどの質問よりも生徒は「英語は必要と感じた」に当てはまった訳である。一方、一番低いのは、Q9: 英語は得意」であった(2.86)。

ここからは目的2の生徒の「英語学習へのやる気」を強める説明モデルを分析した。上述したように、この事業が一過性の効果で終わることなく、中学生の日常の英語学習に寄与するものとなることを願っている。日常の英語学習に寄与するとは、ここでは生徒たちの英語学習へのやる気の向上を意味する。生徒のやる気向上は望ましい波及効果である。アンケート結果を分析して、異文化交流会を通して英語学習へのやる気を強めた生徒のモデルの解明を試みた。

まず質問ごとの相関分析をおこなった。これによって、質問ごとの関連を調べることができ、英語学習へのやる気に関する質問6との関連も見ることができる。その結果、表1が示すように全ての質問間に、程度の差はあれ相関があることが分かった。質問6と最も強い相関($r = .793$)があったのは、質問5「もっと英語を話せるようになりたいと思った。」である。このことから、「英語をもっと話せるようになりたい思いが強ければ強いほど、英語学習

表1 モデルの要約^f

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.794 ^a	0.630	0.630	0.581
2	.820 ^b	0.672	0.671	0.548
3	.833 ^c	0.693	0.692	0.530
4	.838 ^d	0.702	0.700	0.523
5	.840 ^e	0.705	0.703	0.521

- a. 予測値: (定数), [%1; Q5;
- b. 予測値: (定数), [%1; Q5;
- c. 予測値: (定数), [%1; Q5;
- d. 予測値: (定数), [%1; Q5;
- e. 予測値: (定数), [%1; Q5;
- f. 従属変数 Q6

へのやる気をますます強める」と解釈できる。またその逆も真で、「英語学習へのやる気が強くなればなるほど、もっと英語を話せるようになりたいと強く思う」という説明も成り立つ。しかし、「英語をもっと話せるようになりたい」思いと「英語学習へのやる気」に関連があることは分かっても、この結果だけではどちらが「原因」でどちらが「結果」なのかの因果関係を知ることはできない。

そこで、「英語学習へのやる気の向上」との因果関係を突き止めるために、重回帰分析をステップワイズ法を用いておこなった。これは、質問6に影響を与える要因を他の質問から統計的に選び出しながら、「最も妥当性の高いモデルを作る」ためである(石川, 2010, p.118)。表1は、重回帰分析をおこなった結果、それぞれのモデルの説明度を示している。モデル5は最も良く、全体の結果の7割以上を説明できることを示している。

表2によれば、モデル5の「有意確率」は1%未満であり、モデルの当てはまりは非常に高い。5つの要因(質問1, 質問5, 質問7, 質問8, 質問9)が質問6「やる気」に影響を与えていることが分かる。そして、それぞれの影響の度合いは「t値」から説明できる。

このモデルによれば、質問5「英語をもっと話せるようになりたい」が最も影響力が強くて全体の約

表2 係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
5	(定数)	-0.409	0.151		-2.698	0.007
	Q5	0.618	0.030	0.572	20.871	0.000
	Q7	0.119	0.031	0.122	3.810	0.000
	Q8	0.106	0.024	0.136	4.339	0.000
	Q1	0.176	0.039	0.122	4.474	0.000
	Q9	0.055	0.021	0.075	2.700	0.007

a. 従属変数 Q6

3分の2の影響力があり (t 値 = 20.871), 次いで質問1「英語の交流は楽しかった」、質問8「英語好き」、質問7「また交流会をしたい」、質問9「英語得意」の順である。つまり、「英語をもっと話せるようになりたい」と思ったかどうかがとても重要で、「交流を楽しんだ」ことやそもそも「英語好き」であること、そして「また交流会をしたい」と思ったことや「英語が得意」である要素が順に質問6「英語学習へのやる気」に影響を与えたことになる。表2に基づいて作成したモデル図が図11である。

この結果、さまざまな要因が「やる気」に影響を与えていることが分かった。その中でも、「英語をもっと話せるようになりたい」という要因がかなり強力な影響力を持っていることも分かった。しかし、これだけの影響力を持つ「英語をもっと話せるようになりたい」要因については、なぜそう思うようになるかはこれだけでははっきりしない。そこで、質問6を除いて、質問5「英語をもっと話せるようになりたい」を従属変数として、もう一度重回帰分析をおこなって他の要因との因果関係を解析した。そして、表3の結果を得た。

表3によれば、「英語をもっと話せるようになりたい」と思うためには、質問8「英語好き」かどうかが一番重要である。次いで、質問7「また交流会をしたい」と思うことも重要である。また、質問3「英語が必要」と感じるかどうかにも影響があり、質問2「さまざまな文化を実感」することも影響を与

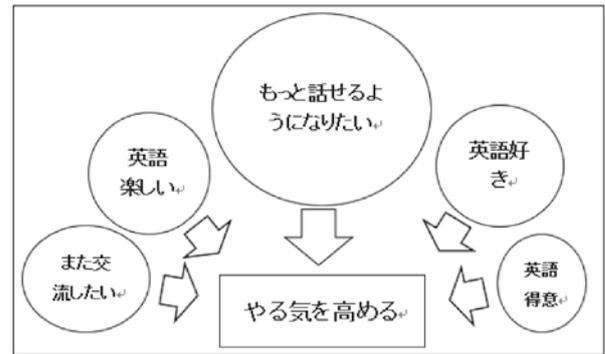


図11 英語学習のやる気を向上させた生徒の意識モデル

えている。最後に、質問2「英語が通じた」という成功体験も影響を与える。

これまでの分析の結果を解釈すると、異文化交流会後に「英語学習へのやる気」を強める生徒モデルは、まず「英語をもっと話せるようになりたい」と思うことが肝要となる。なぜなら、この要因が最大の影響力を持っているからである。「理想の第2言語自己理論」(Dornyei, 2009; Dornyei & Ushioda, 2011)によれば、「将来英語を話している自分になりたい・近づきたい」という気持ちが強いほど、英語学習へのやる気は強まると言う。

そして、「もっと話せるようになりたい」気持ちを強くするには、「英語好き」であることが望ましい。「英語好き」とは内発的動機であり、外発的動機に比べてより主体的であるとされている (Deci & Ryan, 1985)。そして、「交流会をまた持ちたい」や「さまざまな文化」にも影響を受ける。これは異文化や国際交流に対する興味に関するもので、「国

表3 係数^a

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
5	(定数)	0.073	0.223		0.328	0.743		
	Q7	0.235	0.033	0.259	7.040	0.000	0.543	1.841
	Q8	0.190	0.023	0.264	8.192	0.000	0.707	1.414
	Q3	0.316	0.049	0.201	6.491	0.000	0.764	1.309
	Q2	0.197	0.044	0.148	4.461	0.000	0.669	1.495
	Q4	0.072	0.026	0.091	2.758	0.006	0.681	1.468

a. 従属変数 Q5

際的指向性」(Yashima, 2009)とも言い換えられる外国語学習動機である。最後に、英語が「通じた」という成功体験の必要性である。帰属理論(Graham, 1994)によれば、過去の体験は将来の動機づけの原動力になり、成功体験は生徒に英語学習へ肯定的、前向きな感情を抱かせるからである。このようにさまざまな動機付けが絡み合って「もっと話せるようになりたい」気持ちを抱かせていることが分かった。

5. 結 論

本研究の目的の一つは、交流会後の生徒アンケートの分析を通して、異文化交流会が目的を果たしているかを検証することであった。異文化交流会の目的を再掲すると、以下の3つとなる。

- ① 中学生が世界のさまざまな国から来ている本学留学生と英語でコミュニケーションをすることで、英語でコミュニケーションする楽しさを体験し、英語が通じる体験をする。
- ② 中学生が世界にはさまざま言語や文化があると実感し、異文化理解を深める。
- ③ 本学留学生が日本の中学生との交流を経て、日本人や日本文化への理解を深める。

まず目的①であるが、アンケートの結果分析によれば、中学生は英語のコミュニケーションを十分に楽しんだ(93%)。また、57.7%の生徒は英語が「通

じた」体験をした。これらから判断して、目的①は十分に達成できたと言える。

次に目的②だが、質問2「世界にはいろいろな文化があることを実感できた。」に対して、93.3%の生徒は肯定的に回答した。よって、目的②も十分に達成できたと言える。

最後の目的③であるが、留学生にも自由記述式のアンケートを交流会後に実施し、一人ずつコメントを書いてもらった。その結果の一部を以下に掲載した。

参加留学生1の感想：「日本の文化を学べて楽しかった」や「中学生が話しかけてくれて、たくさんコミュニケーションがとれて楽しかったので、ぜひまた参加したい」などと答えた。

参加留学生2の感想：「中学生が積極的で話が弾んだ」や「最初はお互いにシャイだったけど、慣れてくるととても楽しかった」などと答えた。

参加留学生3の感想：「中学生と英語でだけじゃなく、気持ちの交流ができた気がしてうれしかった」や「中学生から知らない日本の文化を教えてもらえてうれしかった」などと答えた。

留学生もこの交流会を通して、日本の文化に触れ中学生との交流を楽しんだことが分かった。日本文化や学校文化をより深く知ることができたようだ。目的③も達成できたと言える。よって、異文化交流

会は当初の3つの目的を全て十分に達成できたと結論付ける。

さらに本研究では、アンケート結果を統計解析を用いてより深く分析し、この異文化交流会を通して英語学習のやる気を向上させた説明モデルを提示した。このモデルから今後の異文化交流会の内容を検討するにはさらなる議論が必要になるため、紙面の都合上ここでは今回得られたモデルから重要な要因とその影響力の大小を提示して、次のリサーチに託したい。その要因のうち最大のものは、「もっと話せるようになりたい」思いである。そして、この要因に影響を与えるのは、「英語好き」の傾向、留学生との「コミュニケーション」や異文化への興味、そして、「英語の必要性」の実感と「通じた」成功体験であり、これらが絡み合って英語学習へのやる気につながっているようである。今後の異文化交流会では、この要因をさらに意識したプログラムの開発が望まれる。

引用文献

- Bandura, A. (2001). Social cognitive theory: An agentic perspective. *Annual Review of Psychology*, 52, 1-26.
- Benesse 教育研究開発センター (2014) 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」 東京：ベネッセコーポレーション. <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356>
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York, NY: Plenum Press.
- Dornyei, Z. (2009). The L2 Motivational self system. In Z. Dornyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language, identity and the L2 self* (pp. 9-42). NY: Multilingual Matters.
- Dornyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow: Longman.
- Graham, S. (1994). Classroom motivation from an attributional perspective. In O'Neil, H. F. Jr., & Drillings, M. (Eds.), *Motivation: Theory and research* (pp. 31-48). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum
- Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL contexts. In Z. Dornyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language, identity and the L2 self* (pp. 140-163). NY: Multilingual Matters.
- 石川有香. (2010). 「第5章 回帰分析：データから説明モデルを作る」『言語研究のための統計入門』東京：くろしお出版
- 金子義隆. (2017). 「英語好きを育むための教育的示唆」『明海大学教職課程センター研究紀要』創刊号, 1-16.
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』東京：開隆堂

資料1 事後アンケート

明海大学の留学生との交流学习は楽しかったですか。今後の参考にしたいので、以下の質問に簡単に答えてください。当てはまる回答の数字に○をしてください。

- とても当てはまる (5)
- 少し当てはまる (4)
- どちらとも言えない (3)
- あまり当てはまらない (2)
- 全く当てはまらない (1)

当てはまる学年に○をしてください。(1年生・2年生・3年生)

1	今回の交流学习で留学生と英語でコミュニケーションをするのは楽しかった。	5	4	3	2	1
2	世界にはいろいろな文化があることを実感できた。	5	4	3	2	1
3	世界のいろいろな国の人と交流するには英語が必要だと感じた。	5	4	3	2	1
4	留学生と英語でうまくコミュニケーションをとれた。	5	4	3	2	1
5	もっと英語を話せるようになりたいと思った。	5	4	3	2	1
6	英語学習をさらに頑張る気になった。	5	4	3	2	1
7	このような交流学习をまたやってほしい。	5	4	3	2	1
8	英語は好きである。	5	4	3	2	1
9	英語は得意である。	5	4	3	2	1

<感想：簡単でいいので、感じたことを何でも書いてください。>

Thank you! ご協力ありがとうございました。